

昭和4年4月の新嘗祭献穀田の御破い。
標柱の文字は偶々帰省中の小室達による(小室栄茂氏所蔵)

千古の歴史を乗せて悠々と流れる白石川。
かつての入海はそこになく、ただ四季を映す美しい田園が広がり、
そこに時を超えて繰り返された人々の努力のありようを伝えている。
自然はときに優しく、ときに厳しい。
相次ぐ冷害、水害の脅威に見舞われながらも、
人々はその度にたくましく立ち上がり、未来に向けて力を合わせた。

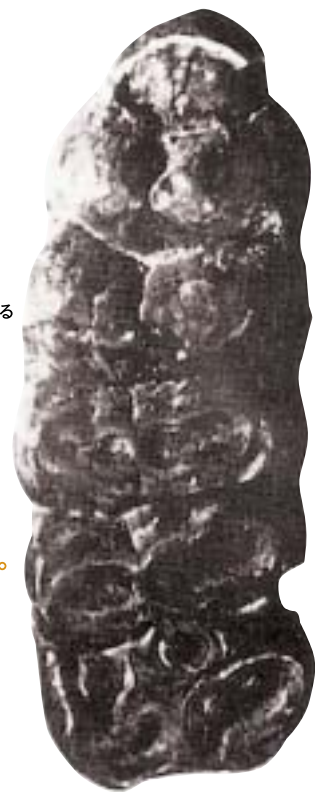
先人の誇りに触れる旅

柴田の源流へ

前史

The History of Shibata Town

大陸から遙か東岸の地へ。
旧象たちの化石が
太古のロマンを物語る。



2500万年前と推定される
象の臼歯の化石
(斎藤美世子氏発見)

前史 The History of
Shibata Town
柴田の源流へ

山々に眠る2600万年前の記憶。
灼熱の熔岩が噴出して
柴田の大地は形成された。

柴田町は、阿武隈山地の北端、高館山地の南端に接し、奥羽山脈から派生した丘陵の東縁部にあります。北部から中央部にかけての三方を丘陵に囲まれた盆地状の地域と南部の白石川河川流域とに大きく区分され、町を囲む数十メートルから三〇〇メートルほどの丘陵は、蔵王から吹き下ろす北西風や海からの風の直接の影響を和らげています。

このような柴田町の大地は、いまからおよそ二六〇〇万年前の火山活動によって形成されたといわれています。この頃、海底もしくは湖底にあった柴田町は、大き

く隆起して陸地となり、さらに地中深くにあった花崗岩が地殻変動によって地表に現れ、その断層からは灼熱の熔岩が噴出しま



上野山へと登る道の途中で見られる花崗岩

した。やがて冷え固まった熔岩は玄武岩質の安山岩などになり、現在の羽山や館山(船岡)などが形成されました。その後、堆積と隆起を繰り返して現在に至る町内からは、この地にかつて旧象が生息していたことを示す痕跡も発見されています。昭和十三年頃、第一海軍火薬廠の建設現場からはエオステドンの下顎骨の化石が発見され、昭和三十四年には、当時、船岡小学校六年生の斎藤美世子さんが並松の自宅裏で、いまから二五〇〇万年前に生息していたステゴロフォドン

先人の誇りに触れる旅 ● 原始



昭和25年、上川名貝塚の調査で見つかった遺物

ました。町内六カ所の貝塚の内、最も古い槻木の松崎貝塚からは、いまから約七〇〇〇年前のものとされる縄文早期の土器が出土し、また最も貝層が厚い上川名貝塚からは、縄文早・前・中期の土器のほか、弥生・古墳時代の遺物も発見されており、人々がこの地を長期にわたって生活の場としていたことがわかっています。

柴田町には縄文時代の遺跡が四〇カ所以上と密度が高く、採取、狩猟、漁撈などを生業とした縄文人の生活環境上、良好の条件を備えていたことが知られています。いまから二万年くらい前、最後の氷河期が終わり地球全体の気温が上昇すると、氷山や氷河が溶けて海面が上昇し、現在の槻木盆地一帯には、人々に豊かな食料を約束する入海が形づくられ



縄文から古墳時代までの遺物が出土した上川名貝塚

約五〇〇〇年前の縄文中期になると、地球は再び寒冷化して海岸線が後退し、入海は沼地となります。沼となっても魚は棲み、シジミは取り付くせないほどでしたが、人々のなかには冬でも鳥や獣が集まる山腹の湧水地近くに生活の場を移す人々も現れました。この頃の遺跡として、船迫の鹿野遺跡からは縄文後期の金剛式土器

小成田の向畑遺跡からは、おどけた表情の土偶などを含む、縄文時代中期末から後期初頭の遺物が多数発見されています。やがて、西日本に伝播した水稻栽培が急速に東日本から北日本へと伝わり、人々は葦の生える沼地を少しずつ開田し、農耕を基盤とした社会や文化をつ



鹿野遺跡で出土した縄文時代後期の金剛式土器

6カ所の貝塚から出土する多くの遺跡が、先人たちの
旺盛な暮らしをいまに伝える。

かつて槻木盆地一帯には
入海が広がり、先人たちに
豊かな食料を約束した。

【川の記憶】

文/日下龍生

「柴田町役場
槻木庁舎」の看板

Column

1



合併当時、槻木庁舎に掲げられていた看板

合併で最も関心が集まるのは、つまり合意に至るまで最も高いハードルとなるのはいつも、新しい町の名前と役場の位置のふたつです。

新しい役場の位置について「合併協定事項」には次のように表わされています。
「柴田町役場は当分の間柴田町大字船岡字広小路四四の三に置く。二、右の期間中旧槻木町役場を柴田町役場槻木庁舎、旧船岡町役場を柴田町役場船岡庁舎と呼称する。三、将来柴田町庁舎は適当の地に建設する。

この表現は、合併実現のための知恵というべきもので、槻木庁舎にも窓口業務のほか、経済課・厚生課が置かれていました。柴田町の特異さは議会事務局は槻木庁舎にありましたが、議会は毎回両庁舎を交互に移動して開会されていたことです。

町内に残る県内最大規模の古墳群。
白石川沿岸には大規模な
集落もつくられていった。

白石川の恵みを得て
稲作文化が開花。これを背景に
各地に豪族が誕生した。



大光院付近の山で発見された
須恵器の大甕

弥生時代以降になると、白石川周辺の肥沃な沖積地を中心に、この地でも稲作農耕が発展し、人々の生活は一層安定するようになります。しかし、その一方では、水田の開発や穀物の貯蔵などに伴



森合横穴墓群

う集団間の利害調整を図る必要から首長の誕生が促され、やがて首長は権力と財力を集めた豪族へと変貌。人々の間には次第に、貧富の差や大きな力をもつ者と支配される者との関係が生まれ

ていきました。

豪族たちはやがて、その力のシンボルとして古墳を造るようになります。この風習は、畿内に誕生した大和朝廷の支配が全国に及ぶに従い広まったもので、「続日本記」の養老五年(七二二)の記述に「柴田郡の二郷を分けて刈田郡を置かしむ」とあることから、この頃すでにこの地方にも大和朝廷の支配が及んでいたことが分かっています。

古墳は次第に、権力者のシンボルから一般の人々の墳墓になっていったと考えられ、柴田町でも多くの横穴墓や円墳が各所に造られました。特に白石川沿岸の丘陵斜面には、いずれも県南地方最大級となる上野山古墳群や森合横穴墓群などが存在し、船迫

地区にはこれらの墳墓の数に相応する規模の集落が営まれていたと考えられています。

また、この時期には、東北全域を大和朝廷のより強い支配下に置く政策の一環として、関東など



葉坂・戸ノ内遺跡で見つかった
平安時代の竪穴式住居跡

からの集団移住が進められ、古くからこの地方に住む人たちのなかには、これに反抗する人々も現れました。こうしたなかから藤原氏の平泉を中心とした華麗な文化が開花することになります。

先人の誇りに触れる旅 ● 中世

前史 The History of Shibata Town

柴田の源流へ



富沢磨崖仏群の六地藏

文治五年(一一八九)の奥州合戦により、平泉の藤原氏は源頼朝に滅ぼされます。この頃の歴史を記述した「吾妻鏡」には、鎌倉を出発した源頼朝が、阿津賀志山の戦いで藤原勢を破り、平泉へ向かう途中、船迫に滞在したと記されており、これが明確に柴田町のもものと確認できる最も古い資料となっています。

藤原氏滅亡後、東北地方は鎌倉武士に恩賞として与えられ、その子孫は次第に東北に移住し、知行地の経営に携わるようになります。大光院所蔵の鉄造阿弥陀如来坐像四体(汗かき阿弥陀)

は北関東に多く見られる鑄鉄の仏像の流れをくむと考えられ、鎌倉武士の移動を示す資料とみることができま

移住して来た鎌倉武士の子孫たちは、柴田町でも新たな新田開発を行うようになったと考えられています。これにより、人々は土砂が堆積した葦原の高いところに住居を構え、その周辺に田を広げていきました。

鎌倉時代の初め、芝田館に芝田次郎という武将がおり、幕府に従わなかったため滅ぼされた『吾妻鏡』にあります。中世も後半になると、柴田郡は伊達氏の支配下にはいり、戦国時代にはその家臣団が柴田町の各所に城を築いて、周辺の農民を支配するようになりました。四保と呼ばれ



中世末期に書かれた「伊達種宗判物」
(平井安三郎氏所蔵)

た船岡には四保氏がいました。また、

入間野をはじめとした各地区には常には農民として生活し、合戦時には戦闘に参加する人々がいました。この人たちは様々な事情で別の土地に移ったり、刀狩によつて農民の道を選ぶことになりました。

移住してきた鎌倉武士の子孫たち。
戦国時代には伊達氏の家臣団が町内の各所に居城した。



入間田の福寿山円龍寺所蔵の
薬師如来立像

第2の開拓期へ。
人々は葦原の高所に居を構え、
その周辺に田を広げていった。

【川の記憶】

文/日下龍生

船岡鉄道病院

Column

2

海軍共済病院跡地に建つ
県立船岡養護学校

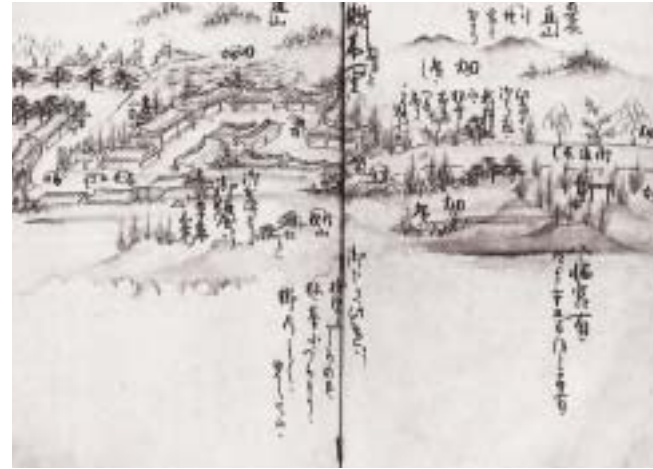


第二次大戦中、第二海軍火薬廠に附属して、現在の船岡養護学校(昭和四十二年開校)の地に海軍共済病院がありました。終戦、火薬廠の閉庁にともない共済病院は船岡鉄道病院として再出発、地域医療の中心的役割を担いました。のちに同院は仙台鉄道病院に吸収され、医療機能は仙南中央病院として再々出発、今日に至っています。

厳しい郡村支配体制のなか、農民たちは村を襲う度々の凶作にも苦しめられた。

先人の誇りに触れる旅 ● 近世

前史 The History of Shibata Town
柴田の源流へ



明和年間に盛岡藩の絵師が描いた「増補行程記」(槻木町部分)

江戸時代に入ると、大規模な水路の開削や河川の改修が行われ、新田の開発に拍車がかかります。石高に比較して家臣の数が多かった仙台藩でも、家臣に荒地を開田させ、これを知行地として与えたことから、新田開発が盛んになりました。柴田町では当初、富沢のような丘陵地の麓を中心に行われていましたが、後に用排水路の整備が進むにつれ、入間野や四日市場のような平地へと田畑が広がりました。

柴田町の領主として、船岡には寛文十一年(一六七二)まで原田氏がいましたが、知行した村の詳細はわかっていません。その後、天和元年(一六八二)から明治維新までは、柴田氏が船岡、上名生、中名生、船迫、成田、小成田、海老穴、葉

坂に知行地を拝領していました。また、寛文年間(一六六一〜一六七二)には岩沼の田村左京が旧槻木町に属する(〇カ村)を拝領し、宝永元年(一七〇四)以降は、宮床の伊達氏が入間田・入間野を拝領していました。下名生は藩の直轄地である蔵入地で、富沢も一時期、村が蔵入地でした。

各村には村長に当たる肝入が任命され、さらに北方の槻木地区と南方の船岡地区に分かれて大肝入が任命されて、それぞれに各村を束ねていました。この上に代官、さらに郡奉行という郡村支配体制のなか、

用排水路の整備が進むにつれ、新田開発の舞台は丘陵地の麓から平地へ。



元禄10年に柴田宗理が藩に提出した「舟岡要害総絵図」(県図書館所蔵)

先人の誇りに触れる旅 ● 近代



昭和9年、東久邇宮が槻木を訪問

戊辰戦争の責任を問われた仙台藩は、藩高を半分以下に減封され、柴田郡など県南の五郡は南部氏の領地となりました。柴田家の家臣のなかには、巨理の伊達家臣とともに、新天地を求めて北海道に移住した人々もいます。そのため、船岡の人口は減少し、寂れた寒村となり、明治二十二年の大火が追い討ちをかけました。また、江戸期に始まった紅花や藍の栽培も輸入品によって打撃を受け

ます。しかし、人々は養蚕に活路を見出し、大正十年代には槻木地区の繭の生産高は県内で二位を争うほどになります。

明治二十二年、町村制施行により船岡と三名生が合併して船岡村が誕生。入間野等(〇カ村)は槻木村となります。二十四年には東北本線が全線開通し、槻木駅が営業を開始します。

この頃、船岡では六沼の干拓が進められ、続いて明治三十七年に町村制を施行した槻木でも、翌三十八年の大冷害を機に耕地整理が開始され、かつての入海は見事な水田に変貌します。さらに大正二年の大洪水を機に白石川の河川改修が進められ、以降、白石川の氾濫はなくなり、昭和四年、船岡は大正七年に

六沼の干拓、耕地整理が行われ、かつての入海は見事な水田に変貌した。

戦後は、米軍に接収されたこの火薬廠跡に工場を誘致して再び船岡発展の原動力にしようという動きが昭和二十五年頃から始まっています。

続き再び大火に見舞われますが、同年、住民運動が奏功して船岡駅が開設されると、十四年には第一海軍火薬廠が開設され、村は活気を取り戻します。さらに十六年には町村制を施行。市制施行も間近といわれますが、二十年の敗戦により火薬廠は閉鎖され、市制施行の夢は露と消えてしまいます。



奥州街道の松並木が藩政時代の姿そのままに残っている

住民運動による駅の開業。第一海軍火薬廠の開設が、村に活気を呼び戻した。

【川の記憶】

合併関係文書から抜粋

新町名

「柴田町」についての説明

館山(四保山・写真右)と並神山の間を東流する白石川



柴田は『延喜式』『和名抄』等の古書に見える地名で、陸奥国の古くからの郡名として有史以前から旧船岡領館山を根拠地とした豪族がこの地方を支配したらしく、旧藩時代にはここに居城を営んだ柴田氏が伊達家重臣として著名である。いま旧槻木・船岡両町を合併した地域は柴田郡中の東端、東北本線に沿う地帯の大部分をしめ、この地域を呼称する名称としては、歴史的・地理的・社会的に「柴田」町以上に適切な名称はありえない。また住民一般の自然に要望するところでもあった。